

甗について

——平安時代の甗を中心にして——

外山政子

1. はじめに

先年、高崎市下佐野遺跡（II地区）の調査・整理に携わる機会を得た。その中で、平安時代の住居跡より出土する「甗」と思われる一群の土器に注意が向き、報告文の「まとめ」において簡単に触れた。⁽¹⁾ その際、不十分な部分があったので、補足の意味あいも兼ねて、改めて稿を起こした。

「甗」あるいは、「甗形土器」とよばれる土器は、底の部分に1個から数個の孔を穿つか、底部を全くの筒抜けに作って簀子などを内側に入れ、蒸して調理する道具、蒸し器としての機能が想定できるものである。この種の土器の出現は縄文時代とも言われ、弥生時代には定着をみ、古墳時代中期から後期にかけて盛行する。その後は徐々に減少傾向をたどって、平安時代には姿を消すと考えられてきた。これに従って当時の食生活も変化が想定され、特に、古墳時代中期から後期には、蒸し飯が日常食として盛行するが、⁽²⁾ その後は、蒸す調理法は特別の時のものとなったと考えられている。⁽³⁾ 甗の果たす役割については、種々論議があるが、「甗」の存在は当時の食生活習慣の一端を示すものとして注目される。

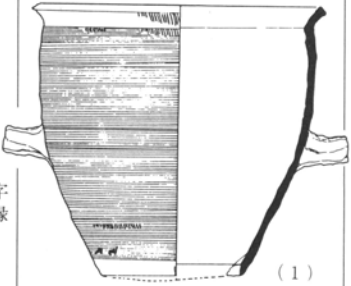
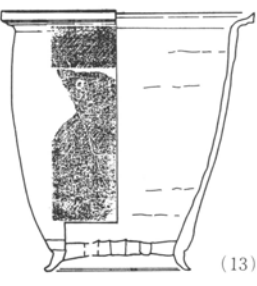
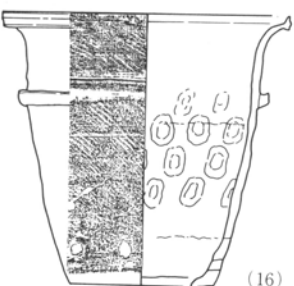
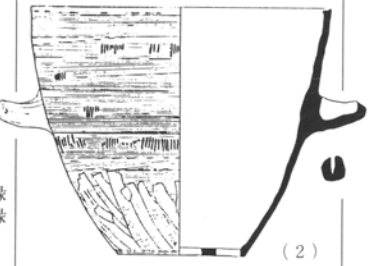
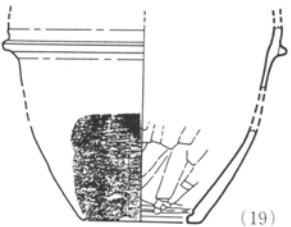
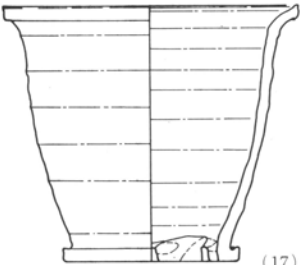
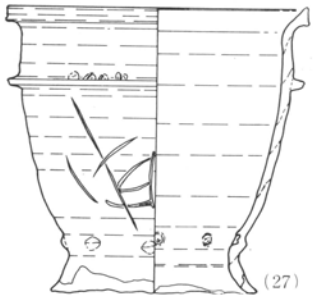
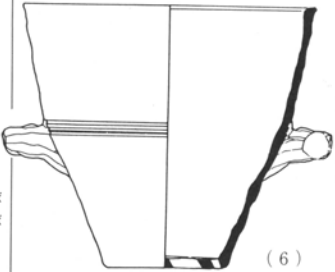
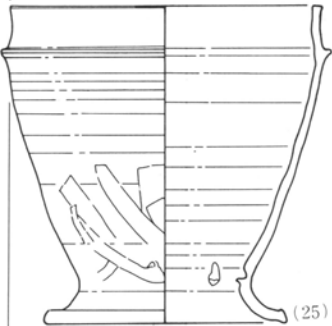
従来、消滅あるいは木製品に転ずるとされてきた平安時代の土製「甗」が、群馬県地域では存在しているが、これにはどんな意味があるのだろうか。まず、平安時代の「甗」の形態の特徴・変化をみ、源流がどこに求められるか、また古墳時代に盛行する「甗」と対比することによって、その性格に違いがあるのかを検討し、存在の意味を考えたい。

なお、ここでは平安時代の群馬県地域の動向を主な検討対象とし、他時期・他地域に関しては多くの方々の研究成果を援用させていただいた。

研究小史

◎「甗」については、早くからその器形上の特色が注目され、特に弥生時代の甕形や鉢形土器の底部に穿孔のある一群について、稲作農耕の開始と共に、食生活の変化を具体的に示すものとして論ぜられてきた。しかし、形態に多様性のあることから、機能についても疑問が出され、特に小型鉢状の甗については甗ではないとする説がある。⁽⁴⁾ 柿沼幹夫氏は⁽³⁾ 弥生時代後期の甗について、二次加熱痕や器外面スレ痕など具体例から、甗の機能を持つと説いている。

◎古墳時代の「甗」については、先の柿沼氏論文が南関東地方出土例を中心に、弥生時代後期から真間・国分期までの各期について検討している中で、主要な部分として扱っている。その中で、住居跡内出土の甗の時期別出土比率を出し、和泉期後半から鬼高期にかけては1軒ないし2軒に

a. 叩き目を残す			
	①把手付	②無把手・無罎	③罎付
I くの字口縁	 (1)	 (13)	 (16)
II 平口縁	 (2)		 (19)
b. ロクロナデ			
	①把手付	②無把手・無罎	③罎付
I くの字口縁		 (17)	 (27)
II 平口縁	 (6)		 (25)

第1図 須恵器甕の分類

1個の割合で出土すること、又、法量を比較して大小の甗に機能分化することを示し、機能効率の良い筒抜け状底部の出現と、甗が従前の台付甗でなくなることから、「従来の非日常的性格を有する用具から、まさに日常用具へと転化したのではないか」とし、その原因を「外来の文化要素」と「それを受容する在地の主体的な成長があった」と説明した。この柿沼氏論文に代表される考え方——和泉期後半以後食生活が変化し、蒸し飯が主体となる——⁽⁵⁾に対して笹森紀己子氏は、「かまど出現の背景」として、出現期のかまどを持つ住居と、甗の出土率の高いことから、カマドと甗のつながりの強さを示し、「日常の米食法が変化したととらえるよりも、この時期に大量に『蒸す』という調理法が『煮る』⁽⁵⁾ことに加わったととらえるほうがよい」とし、大型古墳の出現とも併せて、莫大な労働力が畿内王権に貢納された結果、⁽⁵⁾糲に代表される携行用および保存用食糧の生産が必要となり、カマドと甗の出現をみたとした。いずれも和泉期後半にとらえられる現象として、カマドの出現、須恵器の出現とともに、土師器大型甗の出現も加えられており、古墳時代の一画期として設定されている。又、同時期の土師器大型甗については、中村倉司氏が、⁽⁶⁾埼玉県を中心としてとりあげて、その系譜を韓半島に求めている。

◎奈良・平安時代の甗については、柿沼氏が前掲論文の中で、甗と甗のセットがくずれて甗の出土比率が減少し、小型甗も姿を消し国分式期で消失すること、また、「真間式土器の後半期から国分式土器になって、須恵器の甗形土器があらわれること」を指摘している。この須恵器甗形土器については、「土師器甗の系譜をひいたものではないこと、分布（出土例）に片寄りのあること、出土比率が低い、セットとなるべき土器が明らかでない、大型で重量があつて、土師器甗とのセットになり得ないこと」から、古墳時代後期のものに比べれば日常性の乏しくなった容器であるとしている。

⁽⁷⁾堀田啓一氏は甗全般の分類を行い、須恵器の甗について「古墳時代に須恵器生産と結びついて、和泉地方を中心に、百済系の甗（引用者注、堀田分類AⅡ—多孔・平底・有把手）が展開し、中期から後期にかけて東海地方までひろがり、関東・東北地方まで波及するのは、奈良時代以降となる」と述べている。

また、千葉・山田水呑遺跡で出土した須恵器甗・甗について松村恵司氏は、⁽⁸⁾「煮沸の機能を充足させるため、須恵器よりも耐火度の高い土師質に意図的に焼成したもので、須恵器の製作技術を背景にした、下総・上総特有のものである」と須恵器製作集団のあり方と強く結びつけた考えを示した。

◎平安時代も中期以後にみられる土器——羽釜状の鐏を持ち、底部は筒抜けで、くの字に外反する須恵器甗の口縁状の脚部を付けた土器——⁽⁹⁾を「甗」として注目したのは、田口恵子氏である。氏は「羽釜状底部穿孔土器」と呼称し、羽釜と類似するが鐏に穿孔を有す、焼成前の底部穿孔、脚が大きく外側に開く、大型、土師質との特徴をあげ、他県の出土例や武蔵新久窯出土の須恵器甗をひいて系譜を示唆し、大型で重量のあることから、内容物の重さも考えた場合、共伴する羽釜や土釜はセットとして耐えうるか疑問であるとした。その使われ方についても「一住居単位で

使用された日常的な炊飯用具ではない様相が強く、村落内における集団を単位とした行事・儀式等の際に使用される特殊な土器」とした。

その後、群馬県内で出土例の増加をみ、外山は平安時代の甗の分類及び変遷と若干の検討を行った。⁽¹⁰⁾この中で、羽釜によく似た甗と羽釜の出現は強いつながりがあり、須恵器生産集団の変容と大きく拘わるとした。

以上、研究の現状を概観したが、次に平安時代の「甗」について検討してみる。

2. 平安時代の「甗」

ここで検討するのは、群馬県地域を中心とした。分類は下佐野遺跡Ⅱ地区で行ったものと基本的に⁽¹¹⁾変化はないが、順序が一部入れ替えてある。(第1図～第5図、縮尺 $\frac{1}{8}$)

下佐野遺跡Ⅱ地区出土の平安時代甗は体部の調整がロクロナデで、平縁口縁・口縁下に鐳をめぐらし、底部筒抜けで、脚部がくの字に開くタイプのも(No25)が大部分を占めていた。焼成は還元・酸化ともに存在したが、須恵器本来の焼き締まりのあるものではない。高崎市田端遺跡出土の甗(No27)は、調整はロクロナデで口縁部が須恵器甗のように外反し、外側に肥厚する。脚部の開き方は弱い。焼成は瓦質と言えようか、還元だが焼き締まりはない。県北部月夜野地区菰田遺跡出土の甗(No13)は体部に叩き目を残し、須恵器甗の口縁、底部有底で椀状に切り込みを入れ(第2図10)、脚部は小さいながらくの字に外反する。又、同じくNo16は調整・口縁は同じで有鐳であり、底部が筒抜けで底部より少々上に簀子を受ける椀木をわたす小孔を2個一対作っている。双方とも還元焰焼成であるが焼き締まりはない。こうした異なったタイプの甗には、時間差・地域差が考えられる。まず、形態の特徴によって分類をし、検討を加えたい。

◎分類

体部成整形手法

- a 叩き目を残すもの b ロクロナデのもの

口縁部の形状

- I 口縁部が須恵器甗様に外反して、外縁帯をもつもの

- II 平縁口縁のもの

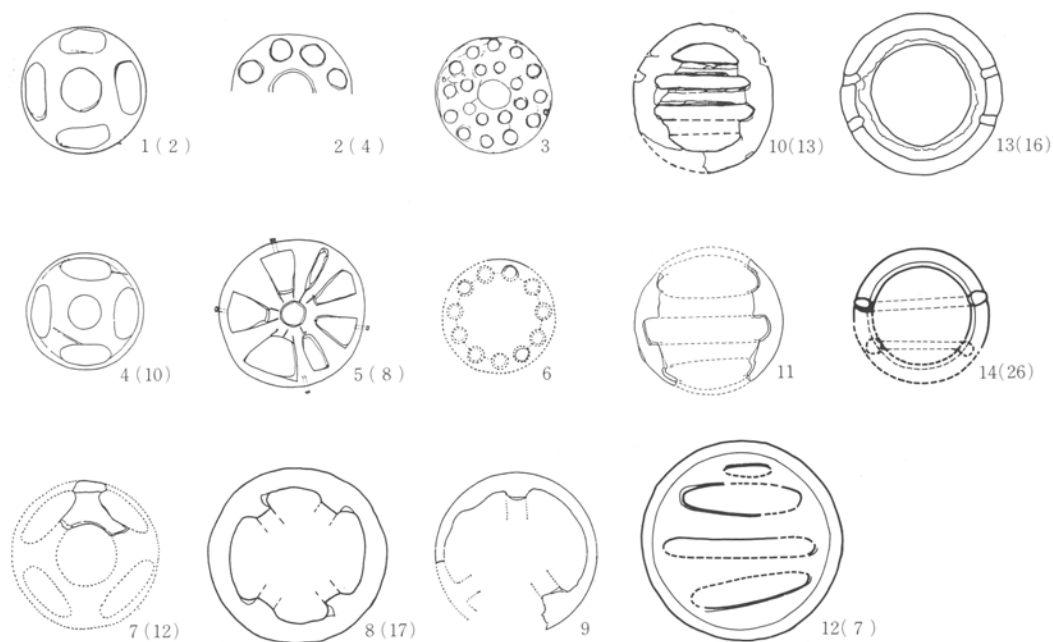
把手・鐳の有無

- ① 把手付 ② 無把手・無鐳 ③ 鐳付

以上のように分けてみた(第1図)。aI①やaII①に入るべきタイプの甗は、9世紀から10世紀の群馬県地域ではみあらず、他県にまで対象をひろげ、年代も遡ぼらせてみた場合には、一気に古墳時代の須恵器甗にまで行きつく。その時間差を埋めるものとしては、⁽¹²⁾堺市小角田遺跡出土のNo7、⁽¹³⁾栃木・薬師寺南遺跡出土のNo8の存在がある。千葉・山田水呑遺跡出土のNo11・12もaI①のタイプに相当するが、把手の退化が著しい。又、ロクロナデ調整を分類基準としたbでは、⁽¹⁴⁾今のところbI①にあたるタイプの出土例を知らない。bII①は福島県塙遺跡の甗があり、これも

把手の退化傾向が著しい。aと同じように、時代・地域をとびこえてみれば、武蔵新久窯⁽¹⁵⁾のNo.9、さらには古墳時代の須恵器甕No.6が、このタイプに相当すると思われる。以上のような基準で分類してみると、a・b、I・IIともに8世紀代の須恵器甕を経て、古墳時代の須恵器甕にまでその系譜をたどることができる。群馬県地域における、平安時代中期から後期の甕であるb I ③・b II ③に相当する土器群は、その焼成が酸化であることが多い。還元焰焼成のものも焼き締まりがなく、9世紀代に位置づけられたb I ②タイプのNo.17や、a I ③タイプのNo.16の出土がなければ、須恵器の系譜をひくとは言い難かった。くの字口縁・鐳付・底部筒抜けで棧木受け孔をもつといった形の上での共通点をもつNo.27とNo.16とは、No.16が体部に叩き目があり、調整技法の上から須恵器の系譜がうかがえる。体部ロクロナデ調整のみのNo.17は、底部の形状が第2図8で、埼玉・若葉台遺跡⁽¹⁶⁾出土の例(第2図4、No.10)や、栃木・薬師寺南遺跡⁽¹³⁾の例(第2図5、No.8)につながり、さらに、大阪・陶邑・深田遺跡⁽¹⁷⁾の例(第2図1、No.2)と同タイプと言って良い。

このように、形や技法の上での共通点がありながら、その焼成状態が本来の須恵器とは異なるのは、甕についてだけでなく、平安時代中期から後期の土器について語る時、しばしば問題にされてきた。同一窯内で多種の器が併焼されることを考えれば、当然のことで、古代窯業が、それを掌握した支配者層の問題も含めて、大きく変質してきたことのあらわれとしてとらえられる。私は製作する側の状況変化及び対応の変化を想定している。これらの焼き物の総称を何と呼ぶかは別として、系譜という点から言えば、平安時代の甕は須恵器であると言って良い。柿沼氏が指摘した「土師器甕形土器の系譜を引いたものではない」須恵器甕の延長線上に平安時代の甕は位



第2図 須恵器甕底部の形

置づけられる。

◎「甗」と呼んでよいのか

平安時代中期から後期の「甗」について、「甗」と呼び得るかを考えてみたい。

蒸し器とする為には、底部の様子がポイントである。b I ③や、b II ③の底部は、第2図14 (No.26) に代表される。筒抜けで、簀子受けの棧木の孔が、2～3孔で一対となる。第2図13 (No.16) のように、体部外側にまで突き抜けてしまう例もままある。この棧木を粘土で作り出しているのが第2図10 (No.13)・11・12 (No.7) のタイプで、第2図4 (No.10)・5 (No.8)・7 (No.12)・8 (No.17)・9の多孔式タイプも同時期に作られている。これは、第2図1 (No.2)・2 (No.4)・3に代表される古墳時代の須恵器甗につながる。このように、第2図に示した底部1～9のタイプは、古墳時代から9世紀まで続き、10～12のタイプは8世紀～9世紀代、13・14のタイプは9世紀後半代～11世紀に続く。各タイプが同時期に併存していることから同一器種のバリエーションおよび変遷の結果と考えてよいだろう。

又、セットとなるべき煮沸具の存在を検討しなければならない。b I ③・b II ③の盛行する時期と考えている10世紀以後の煮沸具は、群馬県地域においては羽釜と土釜である。下佐野遺跡II地区で出土した羽釜の口径と、甗の脚径を測り、対比してみた。その結果、羽釜口径は19～25cmで、20～22cmを中心とする。甗脚径は18～26cmで、21cm前後を中心とする。羽釜の口縁部は内傾するものが多く、蓋をしたり上に他の器を乗せたりするには都合が良い。甗の脚部端からわずかに内側に入った部分の内面にスレやアタリが認められ、この甗を羽釜の上に上置き式に乗せた可能性も考えられる。⁽⁹⁾しかし、田口氏も指摘しているように、この大型で重い甗が上に乗ることで、下の羽釜が耐えうるか、はなはだ疑問である。又、群馬県地域でコの字口縁のケズリ甗がいまだ煮沸具の主体を占めていると考えられている9世紀後半代に、すでにb II ③タイプの甗の存在が確認されている。⁽¹⁹⁾この時期の土師器甗は、体部をていねいにヘラケズリして器肉を薄く作りあげており、羽釜よりさらにもろいことは明白である。羽釜が甗の下にセットされるべき器具として出現してきたと説明し得ても、羽釜出現以前のこの状態の説明がつかなければ、羽釜とのセットもまた危ういとする。須恵器甗で下の器が特定し得るのは、千葉・山田水呑遺跡で示された須恵器甗くらいであろうか。⁽²⁰⁾群馬県地域では、そうした須恵器甗が特定できないでいる。鉄製釜の存在も言われ、充分考慮すべき点であるが、今のところ県内では資料を知らない。

セットになるべき下の器が明確でない以上、「蒸し器」「甗」であるとはいいにくいだが、その一方、古墳時代須恵器甗の系譜に連なるとすれば、それは須恵器製作技術と伴に、韓半島よりもたらされた「甗」であると言えよう。消極的な証明でしかないが、セットとなる下の器については、今後の大きな課題としたい。

3. 須恵器の甗

平安時代中期から後期の羽釜とよく似た作りの甗は、須恵器甗の系譜に連なるものであるとし

てきたが、次に、分類の結果から、時間差・地域差も含めて、須恵器甕を概観してみる。

まず、伴出遺物から時期区分を行ってみると、3期に分けられる。1期は、初現の段階で、およそ5世紀から2期に至るまでとする。2期は、一時、途絶えていたかにみえた甕が再びあらわれる8世紀～9世紀中頃くらいまでの時期。3期は、9世紀後半～11世紀である。

◎1期(第3図No.1～6) 須恵器生産開始と共に出現する時期で、残念ながら群馬県地域では発見例を聞かない。分類で言うとa I ①、b II ①の把手を付するタイプが中心で、底部の形は多孔式(第2図1～3・6)、全体のプロポーションは鉢状で、下の器に挿入したと思われる。出土例も、窯跡を中心とする。特に古いものは、陶邑に代表される和泉地方出土例で、他の地域では愛知・大須二子古墳窯⁽²²⁾、愛知・城山窯⁽²³⁾である。

この初現期の須恵器甕が、韓半島の甕に原型をもとめうることは確実である。韓半島での甕が軟質赤焼きの埴質のものであったのか、還元硬質の陶質土器であったのか、あるいは両方併存するものであったのかによって、日本で生産された須恵器甕も大きくその意味を変えることになる。この時期須恵器の果たした役割は、中心地である畿内と群馬を含む東国では違っていたことであろう。須恵器は希少で、須恵器そのものの儀器性を高めただろう。そうした中で、須恵器製の食物を蒸す道具はどのような扱いを受けたのだろうか。興味のひかれるところである。

須恵器蓋^{はそう}・甕・甕などは、住居跡内出土が増加してくるにもかかわらず、古墳時代後期になっても、群馬県地域では須恵器甕の出土例を知らない。古墳時代中期後半に出現する土師器大型甕とともに、検討すべき問題である。

◎2期(第3図No.7～15) 須恵器甕が再び出現する8世紀代から、一般雑器として生産される方向に徐々に動いてゆく時期である。分類のa I ①・②、b II ①・②・③があり、バラエティに富む。底部の形は多孔式のタイプ(第2図5)、椀状のタイプ(第2図10・12)がある。器形はNo.7・9・13の様に、脚を有するタイプが出現する。前代から伝統が途切れて全く新しい発想で作られているのかと言うと、そうでもないようである。たとえば千葉・山田水呑遺跡のNo.11、印内台遺跡⁽²⁴⁾のNo.12では、把手のかたちこそ退化しているが、底部は伝統的なタイプ(第2図7)である。堺市小角田遺跡出土のNo.7は、出土状況等詳細は不明だが、8世紀中頃ということである。この時期ないしこの地域においては、群馬・薮田遺跡⁽²⁵⁾のNo.13、埼玉・新久窯のNo.9(いずれも9世紀代)でみられる脚付きが、すでに形作られていたことが分かる。体部の叩き目や体部中央に沈線をめぐらすこと、把手を取り付ける事等、伝統にのっとりた作りであるが、底部は椀木状に穿孔し脚を付けるという新しい要素も加わっている。底部が簀子を受ける椀状になることや脚を付けて上置き式にする発想は、中間に木製品の存在を考えてみなければならないと思う。No.8は、底部外側の四方向から、中心に向かって小孔が穿たれており、棒をさし込んで、下の器と組みあわせる際のつかえにしたのかもしれない。この土器は竪穴住居跡より掘えられた状態で出土しており、特別の意味を持つかと報告者は述べている。No.14・15は還元焰焼成・硬質で、未発達ながら鏝をめぐらす。底部が欠失しているため甕か甕か不明だが、甕であるとすれば鏝付のタイプの初現であ

る。この時期の出土例は窯業工人集落と考えられている群馬・蕨田遺跡、埼玉・新久窯・八坂前⁽²⁷⁾窯、比較的特殊な色彩の濃い栃木・薬師寺南、千葉・山田水呑、埼玉・若葉台遺跡群から報告されている。

第2期に須恵器が、一般雑器へ生産領域を広げる時期としても、須恵器甕はまだ特別な意味を持つあり方であったと言える。

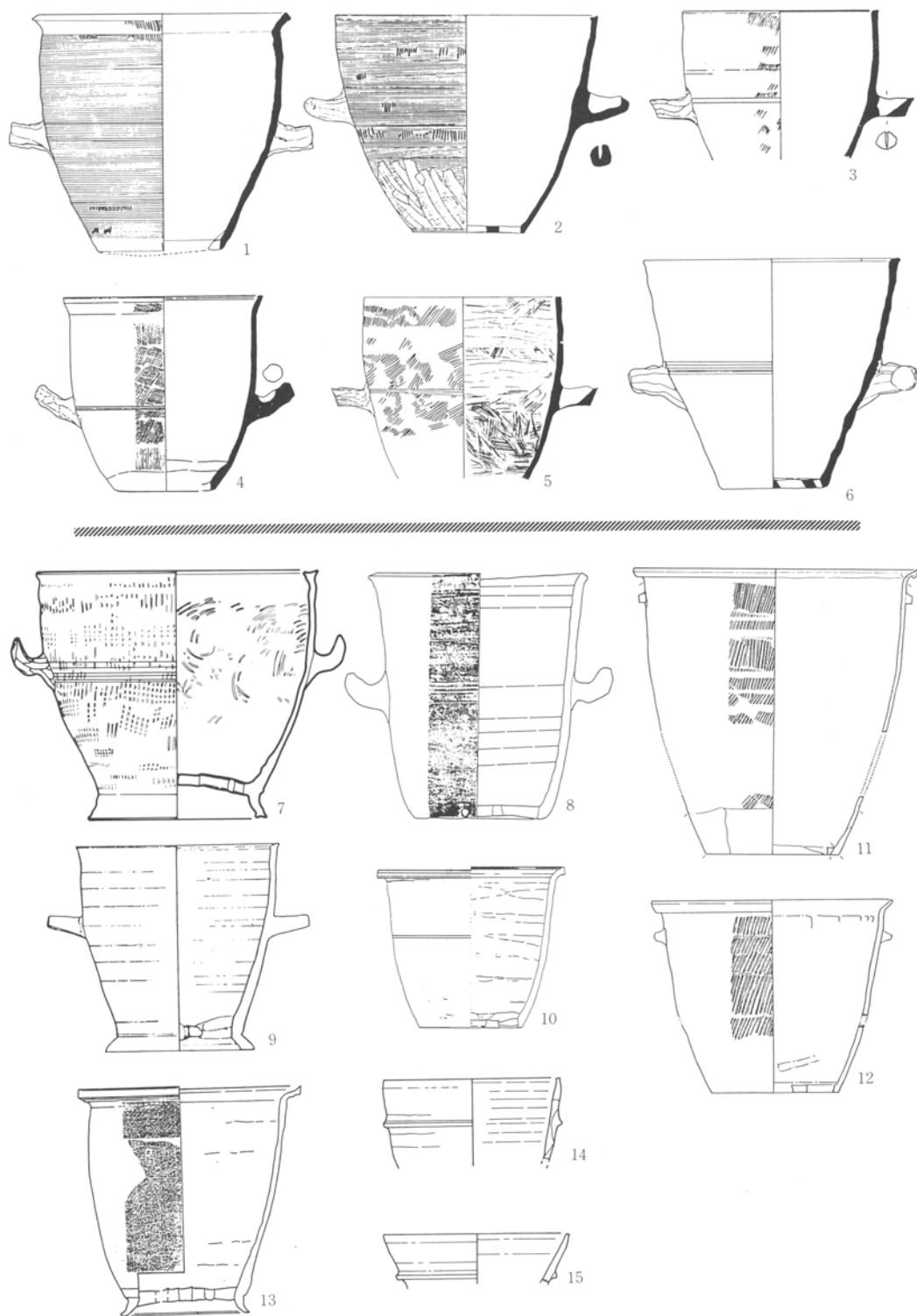
◎3期(第4図) 一般的な集落の、竪穴住居跡から出土する例が増加する。須恵器製作集団が本格的に雑器の生産を開始し、さらに変質していった時期である。

この期は、その主体を占める甕のタイプによって、9世紀代と10世紀以後とに分けることができる。

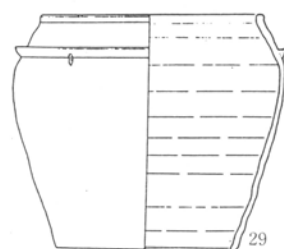
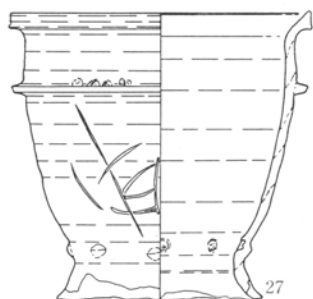
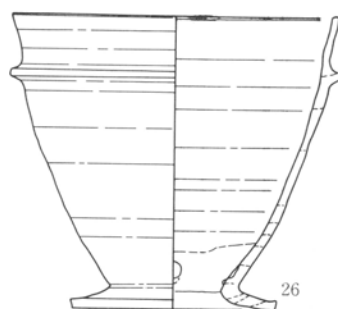
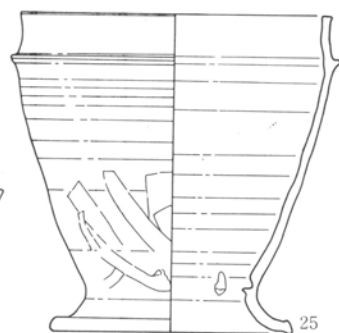
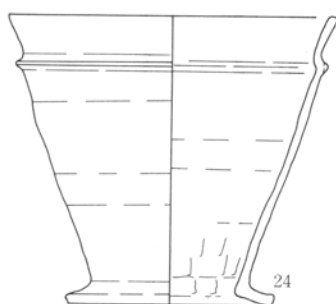
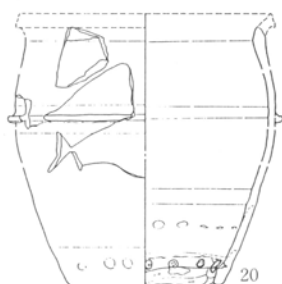
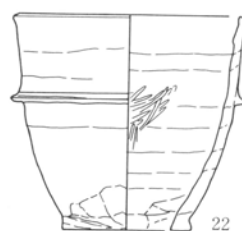
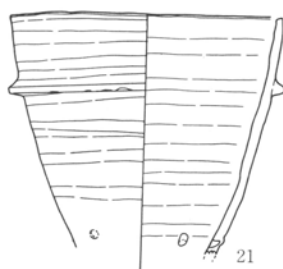
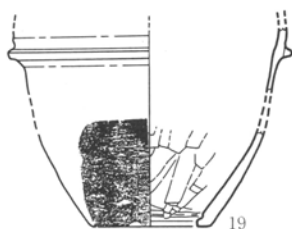
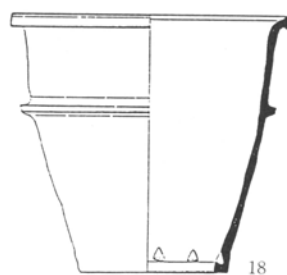
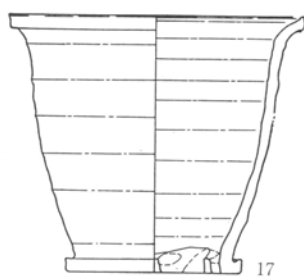
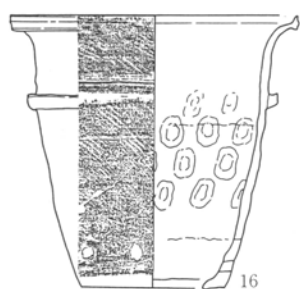
前期の9世紀後半代には、体部に叩き目を残すa I ③、a II ③、ロクロナデだが鉢形で底部に脚を付けないNo17に代表されるタイプがあり、No16・18・19・20のように鐳付のものが増加する。底部の形も有底のもの(第2図8、No17)から、筒抜けのタイプ(第2図13、No16)まであり、No19では内底部に段を作り出して簀子受けとするタイプとなっている。が、主体は筒抜けで受け孔を持つものである。又、鐳をめぐらし、底部筒抜けでくの字にひらく脚をもつb I ③、b II ③が出現するのもこの時期である。この時期は、コの字状のケズリ甕が主な煮沸具である。群馬・太田市寺東遺跡⁽²⁸⁾では、土師器コの字状口縁の甕と9世紀後半代の特徴を示す坏・埴類(口縁端部を強く外側に引き出す)とともに、平縁・鐳付で底部筒抜け・脚付の甕が出土している。口径は推定25cm程で、脚径22cm、内底径15cmである。灰白色・硬質の焼成で、太田市金山丘陵中の窯で焼かれたものであるようだ。高崎市田端遺跡⁽²⁷⁾、下佐野遺跡I地区の9世紀代の住居⁽³⁰⁾からも同ような坏・埴類・コの字状口縁の甕とともに、口縁部から鐳までの丈の長い大形の甕が出土している。この事実は、当地域において羽釜の出現より一歩先んじて甕が出現していることとなり、先に述べた、甕とセットになるべき器は何かという問題を提起してくる。一方では、羽釜出現の事情をさぐるカギでもあろう。

出土例も増加し、千葉・高品遺跡⁽³⁶⁾、埼玉・台耕地遺跡⁽³²⁾(No20)、六反田遺跡⁽³³⁾(No18)などでもみられる。しかし、一集落内での出土比率は高くない様子である。後期とした10世紀代に入ると、No21~29にみられる様に、b I ③、b II ③が主体を占める。底部も筒抜けで、受け孔を設け、くの字にひらく脚付のものとなる。又、羽釜の出現をみ、甕は大型化が目立つ。住居跡内からの出土例も多く、注意してみれば、羽釜のある集落遺跡には甕あり、と言える程多く出土する。むしろ、前述のような鐳付甕の出現の仕方を考えれば、甕を作った集団が羽釜も作り出したと考える方が妥当だろう。従って分布域も、群馬県北部⁽³⁴⁾・中部⁽³⁵⁾・西部⁽³⁶⁾、埼玉県北部⁽³⁷⁾が中心で、盛行期と言って良い。甕の形も多少、地域差・時間差によって変化があり、羽釜の形が変化するのとはほぼ同じ変化を示すのも、両器種のつながりの強さを示すものである。

この傾向は、土釜と呼びならわしている、全く須恵器製作技術のおもかげを残さない煮沸具の出現まで続く。群馬・荒砥上川久保遺跡出土例⁽³⁸⁾(No28)がその好例で、口縁部が鈍く平坦面を持



第3図 第1期・第2期



第4図 第3期

たなくなり、体部の調整は上位までの粗雑なヘラケズリである。しかし、脚部はロクロによる強いナデ調整を行っている。又、No29としたものは、前橋市中島遺跡⁽³⁹⁾の例で、底部が全くの筒抜けで締めりをもたない。器肉も薄く、簀子をどうセットするのか分かりかねる。一つの変化形態であろうか。No28・29は、高崎市北新波遺跡⁽⁹⁾の出土例とも共通の鐳部分に小孔を穿つという特徴をもつ。いずれも、11世紀代に位置づけられる。

同じ頃、他地域では別タイプの甗が知られている。福島・塙遺跡⁽¹⁴⁾で、bII①類にあたるものが出土している。平縁、ロクロナデ、退化した把手付、底部筒抜け、くの字に外反する脚をもつ。又、新潟・金屋遺跡⁽⁴⁰⁾の出土例は体部が細身でヘラケズリ調整、把手付、底部筒抜け、くの字に外反する脚部をもつものであるが、プロポーションが異なること等から、北陸には、北陸のスタイルが存在するのかもしれないと考えている。

この時期以後、群馬県地域においてはとらえにくい時期に突入する。著しく遺跡数、遺物量の減少をみ、伝統が途切れるという印象をまぬがれない。資料の増加や、視点の転換を考えて後、再検討したい。

4. 土師器の甗と須恵器の甗

須恵器の甗とその伝統をひく甗について、分類と時期による変遷を概観したが、次に土師器の甗についても概観し、両者の比較を行いたい。土師器甗については柿沼氏が詳しく検討を加えており、群馬県地域においてもほぼ同様な変化、変遷をたどるので、援用させていただく。それによれば、土師器甗には小型鉢形のもの、須恵器甗の影響を受けたと言われる大型甗とがあり、小型のものは弥生時代からの伝統をひき、古墳時代の終わり頃には姿を消す。大型のそれは古墳時代中期の和泉式土器期後半に出現し、その後、古墳時代後期を最盛期として、奈良時代には急激に減少する、としている。群馬県地域を中心として、須恵器甗出現前後の土師器甗をとりあげ、代表的なものを並べてみたのが第5図である。

くの字に外反する口縁で、体部に丸いふくらみを持ち、底部は筒抜けのNo34は群馬・荒砥東原遺跡⁽⁴¹⁾の和泉期後半の住居から、小型甗のNo30と共に出土している。住居にカマドは付設されていない。No35は埼玉・武良内遺跡⁽⁴³⁾のもので、平縁口縁、丸い体部に把手付、有底で丸く6個の孔を穿つ。これもNo31の小型甗とともに、炉をもつ和泉期後半の住居内より出土している。No34は、須恵器甗a I ①タイプのNo.1、No.4に、No35は、同じくaII ①タイプのNo.2によく似る。土師器大型甗の初現期に、須恵器甗の場合と同様器形の上でI・II類ともに存在することに注目したい。No36・No39は群馬・白藤・新宿遺跡⁽⁴⁴⁾のもので、小型甗にしてはやや大きめのNo33と一緒に、カマドを持つ和泉期後半の住居より出土している。No36は口縁部がやや肥厚して、複合口縁の名残りを思わせるが、有底で丸い5個の穿孔がある。これに対して、No39はほぼ同じプロポーションだが、底部が筒抜けである。群馬・荒砥島原遺跡⁽⁴⁵⁾の、カマドを持つ和泉期の住居から出土したNo40は、No39と同様底部は筒抜けである。No42はやや小振りだが、平縁で体部わずかに丸味があり、

底部筒抜け、把手は無い。カマドを持つ和泉期後半の住居である。No37は、群馬・八幡中原遺跡⁽⁴⁶⁾でNo32とともにカマドを持つ和泉期後半から鬼高期はじめの住居から出土している。くの字の外反する口縁部で、体部は直線的である。群馬・天神風呂遺跡⁽⁴⁷⁾No38は口縁部外反し、体部細身、底部筒抜けで把手付である。これはやや新しい模倣坏と共伴する。No41はNo42と同タイプで、鬼高期に入る住居から出土している。No43～53は最も甗の盛行する古墳時代後期——鬼高式土器期のもので、くの字にひらく口縁部、体部はゆったりとした丸味をもち、底部筒抜け、内面調整はていねいなNo47～49のタイプが代表的である。しかし、バラエティーもあり、体部の丸いNo50、頸部のくびれの強いNo51、長甗を思わせる口縁部が強くくの字に外反するNo52・53等がある。この時期の甗の形が変化に富むのは、比較的小地域単位で変化が定着している甗の変化と連動すると考えられる。

No54は、時代が下って7世紀～8世紀のものである。出土例は少ないが、全く消滅してしまうわけではなく、古墳時代のものとあまり姿を変えずに残存している。小型甗は消滅したと言って良いだろう。

No55は群馬・上西原遺跡⁽⁴⁸⁾出土のもので、9世紀も後半代のものである。同様のものは、今のところ他での出土例を聞かず、この1例のみである。大きめで、体部は丸味を帯び、筒抜けだが、底面よりやや上方に、簀子受けの棧木孔を持つ。退化しているとは言え、体部に把手を付していることも注目される。実見していないので心もとないが、調整方法からみて土師器であるらしく、器形的には、須恵器甗を模倣したものと言えよう。

さて、こうした変化をたどる土師器甗と須恵器甗を比較してみると、土師器大型甗は、須恵器甗と深い関わりを持って出現し、盛行するが、須恵器甗はかえってその時期姿を消し、土師器甗が減少した8世紀代に入ると再び姿を現して、平安時代にまで作られ続けてゆく、という図式が見えてくる。土師器甗と須恵器甗は、果して、相補うものであるのかまず大きさを比べてみることにする。

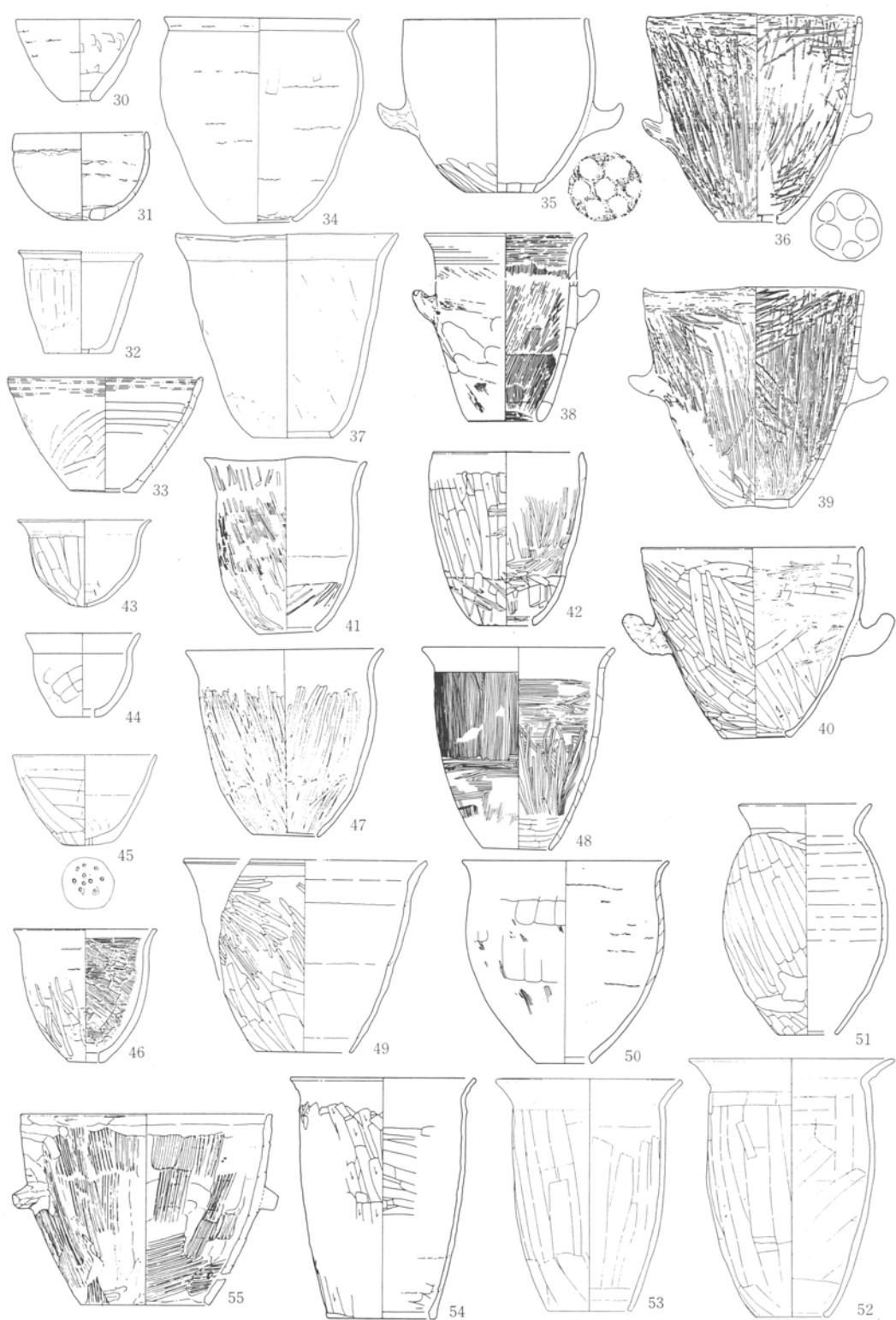
◎法量・容量の測定結果から

第1表は、上方向に口径、左に器高をとり、右方向に容量を測定して記入したものである。口径と器高については柿沼氏も示されたとおり、ほぼ同様の結果を得ているので、ここでは容量を測定し得た35個体についてのみ表示した。土師器甗は、最もポピュラーな時期の、古墳時代後期⁽⁴⁹⁾のもの、須恵器甗は平安時代⁽⁵⁰⁾のものを中心とした。

土師器甗は口径——器高でみた場合、大小のブロックが指摘できる。小型は口径15～20cm、器高10～20cmの範囲におさまリ、大型は口径20～30cm、器高20～30cm前後である。

須恵器甗は、器高では土師器大型品と重なりを示すが、口径が大きめであるブロックを形成している。

容量を比べてみると、各ブロックの差がさらに明瞭で、土師器甗は大・中・小の3ブロックに分離でき、須恵器は土師器の中型に重なるものと、土師器大型品に近い容量を示すもの、さらに

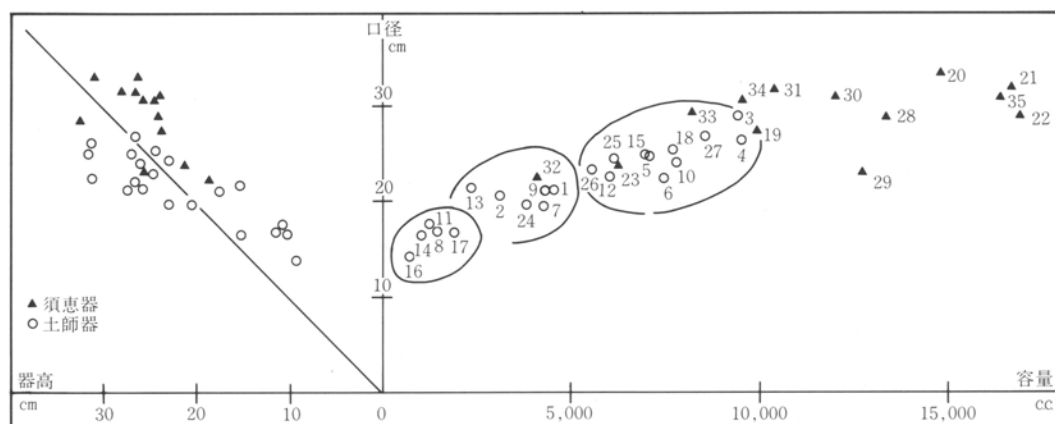


第5図 土師器の甌

とびぬけて大きい容量を示すブロックに分離できる。

土師器甕は大・小の組み合わせの他に、従来大型品としてきた中にも、容量に差をもつことが分かる。これが何を意味するのか——家族構成によるのか、調理対象が異なるのか等については全く不明である。初期須恵器甕にも大・中があるようで、No.1・2・6とNo.3・4・5とでは、おそらく容量に大きな差がでるだろう。器具の大きさが何をきっかけに決定されるのかについては、同時期の須恵器甕も含めて、多くの測定資料の集積が、解決の一助になると考えている。

表で示した須恵器甕は相対的に土師器甕より大きな容量を示すが、資料数が少ないこともあって、全体にバラつく印象である。特に小さな容量を示す表-32は群馬・薮田遺跡出土で、No.13と同タイプの小型品である。表-23 (No.22)・19 (No.21)・33 (No.13)・34 (No.16) は、時期的には2期後半や3期前半に属する。No.21・22は羽釜状甕で、羽釜出現直前のものである。全体傾向として、平安時代の甕でも小さい容量のものは、9世紀代におさまると言えようか。しかし、表-35 (No.7) は特に大型で、時期的にも古い。地域色か、各期を通じて大・小があると考えべきか、資料の増加を待ちたい。表-20 (No.26)・21 (No.25)・22・28 (No.23)・29 (No.28)・30 (No.27)



測定資料・遺跡遺構	容量(cc)	時期	12	53	佐野II539	6028	古墳	24	41	三III15住7	3750	古墳
1 八寸II 6住1	4562	古墳	13		佐野II587	2344	古墳	25	47	三III14住11	6165	古墳
2 八寸二 6住294	3091	古墳	14	43	佐野II 705	1031	古墳	26	48	三III 5住22	5536	古墳
3 AT C10住11	9435	古墳	15	52	佐野II 586	7159	古墳	27		三III 2住18	8610	古墳
4 AT C11住26	9461	古墳	16	44	三III27住11	744	古墳	28	23	村主T33住24	13425	平安
5 AT D12住15	7125	古墳	17	46	三III27住10	1931	古墳	29	28	AT 3区4住	12713	平安
6 AT C25住8	7507	古墳	18	50	三III12住3	7721	古墳	30	27	田端B110住18	12039	平安
7 ATA38住9	4219	古墳	19	21	佐野II1629	9976	平安	31	17	洞69G	10459	平安
8 ATH 8住8	1424	古墳	20	26	佐野II 831	14812	平安	32		薮田5 K09-1	4130	平安
9 AT C 5住1	4375	古墳	21	25	佐野II 368	16751	平安	33	13	薮田41土29	8206	平安
10 AT C 2住11	7821	古墳	22		佐野II 66	16933	平安	34	16	薮田42土26	9564	平安
11 45 佐野II 310	1294	古墳	23	22	佐野II 16	6271	平安	35	7	大阪堺小角田	16554	奈良

○内の数字は掲載図No、八寸=上武八寸遺跡、AT=荒砥天之久宮遺跡、AK=荒砥上川久保遺跡、佐野II=下佐野遺跡II地区、三III=三ツ寺III遺跡、村主=月夜野村主遺跡、田端=田端遺跡、洞=月夜野洞遺跡、薮田=月夜野薮田遺跡

第1表 甕計測表

は、いずれも3期後半に属するもので、この時期の甗の容量の大きさを示すと言えよう。容量のccを升になおしてみると、大型品は9升から5升、小さいものは2升から4升となる。これは口一杯まで入れた場合であるが、実際に使う場合は7～8割が限度であろう。7割方としても、大のグループでは約6.5升（表—21・22・35）、5升前後（表—20・28・29・30）、1.5升から3升（表—23・32・33）の容量である。延喜式の中では、甗の大きさについて「受七升」「受六升」と容量で記載されている。古代の単位の実体に関する研究によれば、1升は今のほぼ4合にあたるように、⁽⁵¹⁾「七升」は2升8合、「六升」は2升4合となる。この容量にみあうものをあげれば、表23・33で須恵器甗としては小さめのものである。最大容量が4升までのものをならべてみても、表19・31・34が含まれるくらいである。むしろ、古墳時代の土師器大型甗が、その対象範囲の容量を示すことに興味がひかれる。しかし、古代の容量との比較・検討は、測定資料があまりにも少なく、解決しなければならない問題も多い。ここでは、単に文献に記載された甗の容量よりもさらに大きな容量の甗が、10世紀以後の東国地域に存在することを指摘するにとどめたい。

5. ま と め

以上、平安時代の甗の存在から土師器甗の対比までを、大ざっぱにながめてみたが、まとめとして平安時代甗の意味を考えてみたい。

平安時代の甗は器形や焼成の変遷、成整形技法などから、古墳時代須恵器甗に源流を求められる。大阪堺市小角田遺跡の出土例は、両者を結ぶ中間での良好な資料である。

それでは、この器種が果たした役割はどうであっただろうか。

出現期（1期）の甗は韓半島とのつながりの強い器種である。ほぼ同時に、土師器大型甗も出現する。堅田 直氏の指摘されるように、⁽⁵³⁾初期須恵器出現と相前後する時期にみられる、軟質赤焼き、叩き目文を持つもののほとんどが、加熱行為を伴う甕・甗のたぐいとかがえられるならば、時を経ずして土師器大型甗が、九州～近畿地方においてカマドと共に出現することもうなずける。もともとの故地である韓半島で、硬質・灰陶系のものと、軟質赤焼きのものとで、使い分けがあったかどうか、勉強不足で検討できない。ただ、金 延鶴氏の指摘によれば、⁽⁵⁴⁾韓半島での甗は、軟質赤焼きのものが多数を占め、硬質・灰陶系のものは少ないとのことである。両者の量差は、使用頻度のちがいを示しているだろう。軟質赤焼きのものが加熱用実用品であるとできるならば、韓半島における焼成の異なった2種類の甗を、我が国でもそのまま実用品の土師器と他の要素を含む須恵器とに区別して受け入れたと考えられる。土師器大型甗は須恵器の模倣として出現するのではなく、模倣すべき源はそれぞれ灰陶系、埴土系の両者にあるだろう。土師器大型甗は実用品である為に土師質である必要があり、韓半島の食生活習慣そのものの移入の結果と言える。単に物や技術が伝わるだけでなく生活習慣も伝わっていることは、人の移動をも考えるべきで、その規模や移住地域等によって、ひきおこされてくる変化は一樣ではない。カマドや甗の使用が生活様式や食べ物に対する意識改革の結果である為に、各地の伝統のちがいが作用しやす

い。甗の器形の多様さ、地方化の度合いの強さにこうした事情が反映していると言えないか。

関東地方において、土師器大型甗が出現するのはカマドの出現直前で、和泉期後半である。住居にカマドが付設される時期は、須恵器の共伴も認められる。この須恵器は陶邑で言う初期須恵器の最古段階より若干新しく、TK208に相当すると言われる⁽⁵⁵⁾。須恵器甗は最古の段階からあり、関東地方の土師器甗もTK208に相当するものよりも1段階古い時点で出現する。この時期は地方窯の宮城・大蓮寺窯などの出現とも重なり、東国に須恵器製作技術を含む文化の波及があったと考えられる。

須恵器製作技術の波及とともに、関東地方にも土師器大型甗が出現したのに対して、須恵器甗は、窯跡・生産地を中心とした出土例のみであり、窯跡の出土資料中でも出土量が少なく、従って生産数も少なかったと考えられる。

群馬県地域での、初期須恵器窯跡の発見例は今のところ無い。窯を作り得たのが、非常に限られた地域であり、未だその拡散をみない段階であることが考えられ、須恵器そのものも貴重性・政治性をそなえていたことがうかがえる。その中でさらに少ない甗であれば、とうてい実用品とは考え難い。一種の儀器と考えるのは早計だろうか。

平安時代も10世紀の須恵器甗、3期後半とした時期の甗は、すでに酸化焰焼成のものが多い。下佐野遺跡II地区の例によると、外面に多少の加熱痕があったり、内面に炭化物の付着が認められたりした。住居内の出土例も増加し、羽釜と共伴する例が多い。下佐野遺跡II地区では10世紀前半代の住居から2軒に1軒の割合で出土しているが、田端遺跡では4～5軒に1軒の割合かという印象である。出土状況はカマド周辺からのものが多く認められ、実用的な道具と考えている。

このように1期と3期の須恵器甗は、生活上果たした役割が大きく異なっていた事が指摘できる。

2期の甗は1期から3期へ至る、中間的色彩を持つものと考えている。松村恵司氏が山田水呑遺跡で指摘し、須恵器の焼成変化がこの時期から始まることも、実用品として須恵器甗が登場してくることを示す。しかし、一方では、薬師寺南遺跡⁽¹³⁾のように、儀器的様相を示す例もある。この期の出土例は生産地に片寄る傾向がありながら、住居内出土の例も増加してきている。器形も底部に脚を作り出し、あるいは肥厚させて安定度を増加させている。又、木製品からの発想借用を思わせる、底部の棧状作り出し（第2図10～12）をおこなっている等、製品のより使い易さを追及しているように思われる。2期は、須恵器甗が儀器から一般実用品へと役割を方向転換しはじめた、過渡期であると考えべきだろう。この傾向は、同時に、須恵器が一般雑器生産へ領域を拡大する現象ともつながり、東国の須恵器生産集団の変容の一環としてとらえられる。

以上のように、平安時代の甗が実用品として生産され使用されるようになるには、生産者側の問題がかかわっていたことに因を求めるとしても、なお、何故これ程までに大型品であるのか説明できない。

古墳時代の中期後半頃に、須恵器製作技術を含む文化伝播と共に、波及し定着したと考えられ

る多量に蒸す調理方法とその器具は、7世紀から8世紀に入ると減少することが指摘されている。文献の上でも、大化の頃に甗を貸したり、借りたりする事態が記載されている。⁽⁵⁷⁾畿内を中心とする地域の事情とも考えられるが、時期を同じくして、東国でも土師器甗の出土例が減少している。その後の土師器甗の器形変化——長甗が徐々に丈が短くなり、体部をヘラケズリによって薄く仕上げるようになること——とあわせて、このあたりから再び、主食や常食とすべき食物の調理形態が変化しつつあったと考えられる。この現象を、柿沼氏は、⁽³⁾律令体制施行による、収奪強化の結果として説明している。支配体制の変化・強化は、量的にも質的にも徴税強化を意味し、勸農政策による作物の多様化もひきおこされたことであろう。従って、庶民の食生活への影響も大であったと考えられるが、甗の変化速度から言えば、食生活が激変したとは言いがたい。甗の減少は食生活の変化が起きる一方で、木製品の出現等の現象も作用したと考えられよう。

平安時代に入ると、群馬県を中心とした地域の土師器甗は、コの字状口縁のケズリ甗へと変化をたどる。この甗はごく薄手で、小さい底部が平底のもの、八の字にひらく丈の低い脚台を付しているもの、脚台付小型甗の3種に分けられる。いずれも外面は二次加熱によって表面が変質し、ススが付着し、内面には炭化物の付着をみることが多い。⁽⁵⁸⁾

10世紀になると、当地域では中部から西部にかけて羽釜が出現し、盛行する。⁽⁵⁹⁾この器も、前代の土師器甗と同様に、大・中・小とあり、内面には炭化物が付着していることが多い。

このことから、平安時代の群馬県地域の煮沸具である甗と羽釜は、使用法にはさほどの変化はなく、奈良時代以後、煮る調理法へ変化してきた延長線上に位置すると考える。この様な時期に、何故、実用品でとびぬけて大型の甗が存在するのか、疑問である。確実なところは何も無いが、次の様に推測している。

大型で容量も多いことから、一度に大量に蒸すことが可能である。一度に多量に食料を作る必要があるとすれば、季節の折目、節目の祭りや祝い事がまずあげられる。又、麴などの製造も考えられる。また、変質を余儀なくされていたとは言え、律令体制も存続する社会では、「糲」の生産も重要視される。⁽⁶⁰⁾糲は、備蓄用の貢納、あるいは東国経営のための多くの兵士が東北地方へ派遣される際にも、自分で自参すべき食糧であった。⁽⁶¹⁾兵士1人につき6斗の糲を必要とすれば、大型タイプの甗で蒸して作ると考えても、最低4回は蒸す作業が必要である。郡や国の役所に貯蔵すべき義務もあったわけで、さらに大量の糲が必要とされる。あるいは時季を選んで、集団作業として、糲の製造を行ったなどということかもしれない。多量の食糧生産に、大型の器具が使われていたであろうことは想像に難くない。平安時代中期から後期は、この地方においても動乱の要素の強い時期であったことも考えあわせたい。⁽⁶²⁾須恵器生産を掌握していた層が、糲の生産についても掌握し発令していたとも考えられる。

儀式用の食糧のためと、糲の製造とためという二つの可能性のうち、どちらが大型甗出現のきっかけであるかは、決めかねる。根拠は薄いだが、7・8世紀代の畿内では、甗が貸借の対象となる程度にしか食生活上の必要度がなかったとすると、社会状態の中で、強制的な要素の強い「糲」

の製造にむしろ妥当性があるような気がしている。

ここでは、群馬県地域を含む東国の政治・社会状況の要請と、同じ要素の中で変容をとげてきた須恵器生産集団の事情とが、大型甗の出現をよんだとしておく。

6. お わ り に

古代から、現代に至るまで、私達の食生活は大きく変化を遂げたが、その実激変したのは、近年の40数年間のことで、それ以前は牛歩の如き変化と発展であったのかもしれない。そんな食生活の変化を遺物の変化の中から追えるだろうか、と考えて、甗、とくに平安時代に出現する大型甗をあつかってみた。わずかに、群馬県地域における、平安時代甗の源流と、変遷を示し得たにすぎない。ひとえに、自身の不勉強のためであると反省している。

甗は、各時期にわたり、他地域にも分布しており、使用方法や何を作ったのかなどについても、まだまだ検討する余地のある器具である。平安時代の甗も、埼玉県をはじめとして千葉県、長野⁽⁶³⁾県、新潟⁽⁶⁴⁾県、石川⁽⁴⁰⁾県、福島⁽⁶⁵⁾県、宮城⁽⁶⁶⁾県などでも報告されている。地域によって出現や発展の状況がどれだけ異なるか、タイプや系譜のちがいはどうかなど、今回全く検討出来なかった。各種資料の集積、特に測定資料の増加を計ることや、故地とされる韓半島の状況把握など、今後の私自身の課題として、筆を置きたい。⁽⁶⁸⁾

本稿を記すにあたり、多くの方々から御指導、御協力を得た。粕川村教育委員会の小島純一氏、太田市教育委員会の宮田 毅氏、当事業団の飯塚、誠・飯田陽一・井川達雄・女屋和志雄・下城正・関 晴彦・徳江秀夫・中沢 悟氏よりは、資料の提供とともに有益な御助言を賜った。又、須恵器全般については当事業団の大江正行氏の、土師器の編年及び年代観については坂口 一氏の御助言を得た。なお、堺市教育委員会・埋蔵文化財センター及び、同センター樋口吉文氏には、貴重な未発表資料の実測図を提供していただき、掲載の許可までいただいた。記して、深く感謝する次第である。

又、図版作成の一部については、藤井輝子氏をわずらわした。あわせて記して感謝の意とした。
(1987. 1. 14)

註

- (1) 女屋和志雄 『下佐野遺跡Ⅱ地区』(勸群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986, 3)
- (2) 間壁霞子 「食生活」『日本考古学を学ぶ』(2) 1979
- (3) 柿沼幹夫 「甗形土器に関する一考察——南関東地方出土例を中心として」『埼玉考古15』 1976
- (4) 岩崎卓也 「甗小考」『信濃』 18巻4号 1966
佐原 真 「農業の開始と階級社会の形成」『岩波講座日本歴史1 原始および古代』 1975
- (5) 笹森紀己子 「かまど出現の背景」『古代』 72号 早稲田大学考古学会 1982, 3
- (6) 中村倉司 「大型甗」『土曜考古』 5号 1982
- (7) 堀田啓一 「日本上代の甗について」『日本古文化論叢』(榎原考古学研究所編 吉川弘文館 1970)
- (8) 松村恵司 『山田水呑遺跡』山田遺跡調査会 1977
- (9) 田口恵子他 『高崎市北新波遺跡』高崎市文化財調査報告書 第33集 1982
- (10) 注(1) 第6章 検出された遺構と遺物 (3)まとめ (3)平安時代
- (11) 注(1)による分類は器形を第1に考えたが、今回は成整形手法を優先させた。

- (12) 大阪府堺市所在 堺市教育委員会・堺市文化財センターより 未発表の資料を掲載させていただいた。
- (13) 橋本澄朗 『薬師寺南遺跡』栃木県教育委員会 1979
- (14) 福島県いわき市塙遺跡 大越道正 『東作田C遺跡 母畑地区遺跡発掘調査概報・福島県文化財調査報告書』 第13集より
- (15) 坂詰秀一編 『武蔵新久窯跡』
- (16) 玉利秀雄 『若葉台遺跡群C～I地点』鶴ヶ島町教育委員会 1983
- (17) 中村 浩 『陶邑・深田』大阪府文化財抄報 第2輯 (大阪文化財センター 1973)
- (18) 中沢 悟氏による 「土師質土器」注(20)第5章第2節(3)古代の遺物1「土師質土器について」 1981
桑原滋郎氏による 「須恵系土器」『東北地方における古代土器生産の展開』考古学雑誌57-3 1972他
シンポジウム 古代末期～中世における在地系土器の諸問題 神奈川考古第21号 1986
- (19) 群馬・太田市寺東遺跡9号住居跡、等
- (20) 中沢 悟 『清里・陣場遺跡』(群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982)
- (21) 須恵器生産開始年代については、5世紀中葉とする説ともう少し遡ぼるとする説があるがここでは、後者の立場をとっている。
- (22) 斉藤孝正 「東海地方」『初期須恵器の源流』
- (23) 増子康真 「尾張における初期須恵器生産形態の検討」信濃32-6 1980
- (24) 寺村光晴他 『印内台』印内台遺跡調査団 1980, 3
- (25) 下城 正・関 晴彦 『藪田遺跡』(群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985)
- (26) 原 雅信・中沢 悟 『藪田東遺跡』(群馬県埋蔵文化財調査事業団)
- (27) 坂詰秀一 『八坂前窯跡』
- (28) 注(9)に同じ 群馬県太田市所在、寺井庵寺跡の北側で、9世紀代を中心とした集落遺跡 太田市教育委員会
- (29) 高崎市阿久津町所在、現在整理作業中、B区30号住・113号住が相当する。
- (30) 下佐野遺跡I地区A-90号住、現在整理作業中
- (31) 古内 茂 「商品第2遺跡」京葉 1973
- (32) 酒井清治 『台耕地II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第33集 埼玉県埋蔵文化財事業団 1984
- (33) 梅沢太夫他 『六反田』埼玉県歴史資料会編・大里郡岡部町六反田遺跡調査会 1983
- (34) 藪田東・大釜・村主遺跡・月夜野古窯址群真沢A支群窯
- (35) 中島荒砥・青柳寄居・芳賀遺跡
- (36) 清里・陣場・中尾・日高・北新波・舞台・雨壺・鈴の宮・下佐野・田端・吉井黒熊
- (37) 宮西・瓶薮神社前・田中遺跡
- (38) 飯田陽一 『荒砥上川久保遺跡』(群馬県埋蔵文化財調査事業団)
- (39) 唐沢保之 『中島遺跡発掘調査概報』前橋市教育委員会 1980
- (40) 山本 肇他 『金屋遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第37集 新潟県教育委員会 1985
- (41) 飯田陽一 『荒砥東原遺跡』(群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984)
- (42) 和泉式土器・鬼高式土器の型式については、検討すべき問題が指摘されているが、私自身は判断すべき規準を持たない為、ここではとりあげず、模倣坏の出現をもって鬼高式とする従来の見解に従っている。
- (43) 栗原文蔵 『国道17号熊谷バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告 鴻池・武良内・高畑』埼玉県教育委員会 第11集
- (44) 小島純一 『柏川村の遺跡』群馬県勢多郡柏川村教育委員会 1986
- (45) 石坂 茂 『荒砥島原遺跡』(群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983)
- (46) 神戸聖語 『八幡中原遺跡』高崎市文化財調査報告書 第31集 高崎市教育委員会 1982
- (47) 山下歳信 『天神風呂遺跡』大胡町発掘調査報告書 第1 群馬県勢多郡大胡町教育委員会 1981
- (48) 松田 猛 『上西原・向原・谷津遺跡』群馬県教育委員会 1986
- (49) 容量の測定は、三次元空間測定機(ベクトロン)を使用し、佐藤元彦・岡 晴彦氏の組んだシステムによった。測定は実測図の内底部中央より口縁端部までなぞり、反転させ演算した。
- (50) 八寸B遺跡・荒砥天之宮遺跡・三ツ寺III遺跡・下佐野遺跡の資料を使用した。
- (51) 吉田恵二 『「延喜式」所載の土器陶器』
- (52) 小泉袈裟勝 『枹』ものと人間の文化史36
沢田吾一 『奈良時代民政経済の数的研究』 1972復刻
- (53) 堅田 直 『韓半島伝来の叩目文土器(韓式系土器)について』『日・韓古代文化の流れ 帝塚山考古研究所』 1982
- (54) 金 廷鶴 「加耶土器」『世界陶磁全集』第17巻 韓国古代
- (55) 坂口 一氏御教示による、本紀要中、坂口氏論文参照
- (56) 中村 浩 「須恵器生産の諸段階——地方窯成立に関する一試論」
- (57) 「大化の甲申の詔」旧俗の改廃、「復有百姓・就他借飯炊飯。基甕触部而覆、於是、甕主及使拔除」日本書紀考徳
- (58) 坂口 一・三浦京子 「奈良・平安時代の土器編年」『群馬県史研究』24 1986
- (59) 群馬県内において、羽釜の分布範囲は、中央より西側が中心で、東部は土師器甕が残存する。
- (60) 竈については、注(6)の笹森論文に詳しい。

- (61) 「養老律令」卷六 軍防令第十七「凡兵士・人別備糲六斗。塩二升。」
 (62) 天慶二(838) 出羽夷俘反乱鎮圧に出兵、承平・天慶の乱(935~940)等
 (63) 千葉・向台遺跡、大畑遺跡、印内遺跡、遠寺原・西寺原遺跡、北海道遺跡、宗吾西鷺山遺跡
 (64) 笹沢 浩氏の御教示による。
 (65) 富山県小杉大門遺跡
 (66) 福島県東作田C遺跡・塙遺跡
 (67) 宮城県・後河原遺跡、多賀城・上新田遺跡、安久東遺跡、家老内遺跡
 (68) 甗によって、人々が何を調理し食したかについては、なかなか具体的にできない。古墳時代の小型甗は、粉類の調理用、大型甗は蒸し飯用ではないかと思っている。今後の課題としたい。又、佐原 真氏より、「関東地方における甗の消長と同様の变化をたどる地域は、三河・遠江・信州から宮城まで確認できるが、尾張・加賀および畿内では甗の出土率が低いことから、弥生時代以来米を煮て食したと考えられる」との御教示を得た。この差異が、食生活の違いを示し、さらに文化圏のちがいとしてとらえられるだろうか。縄文時代から弥生時代へ、さらに古墳時代へと文化の異差が存続していくのか、それは何に因るのか、興味をそそられる問題である。今後ひきつづき検討してゆきたい。

参考文献

- 岡田淳子・服部敬史 『八王子中田遺跡』資料篇Ⅲ 八王子市中田遺跡調査会 1968
 小田富士雄 「百済の土器」『世界陶磁全集』17 韓国古代
 木下正史 「古代炊飯具の系譜」『古代・中世の社会と民俗文化』1976
 高橋一夫 「和泉 鬼高期の諸問題」『原始古代社会研究Ⅱ』原始古代社会研究会編 1975
 田辺昭三 『須恵器大成』
 中村 浩 『陶邑』大阪府文化財調査報告
 栖崎彰一 『世界陶磁全集』2 日本古代
 『古事類苑』器用部 吉川弘文館

掲載資料一覧

- | | |
|----------------------------|----------------------------|
| 1 大阪・陶邑・深田遺跡 S D001 | 36 群馬・粕川村 白藤・新宿遺跡 BH 4号住 |
| 2 " " " | 37 群馬・高崎市 八幡中原遺跡 152号住 |
| 3 大阪・陶邑 T K85 | 38 " ・大胡町 天神風呂遺跡 17号住 |
| 4 " ・ " T K216 | 39 " ・粕川村 白藤・新宿遺跡 BH 4号住 |
| 5 " ・ " T K73 | 40 " ・前橋市 荒砥島原遺跡 B-2号住 |
| 6 " ・陶邑・深田 S D001 | 41 " ・群馬町 三ツ寺III遺跡 15号住 |
| 7 " ・堺市小角田遺跡 第1地区 S K64 | 42 " ・前橋市 荒砥島原遺跡 E-5号住 |
| 8 栃木・薬師寺南遺跡 33号住 | 43 " ・高崎市 下佐野遺跡II地区 6区7号住 |
| 9 埼玉・新久窠 C地点1号窠 | 44 " ・群馬町 三ツ寺III遺跡 27号住 |
| 10 " ・鶴ヶ島町 若葉台遺跡 D-1号井筒 | 45 " ・高崎市 下佐野遺跡II地区 5区4号住 |
| 11 千葉・山田水呑遺跡 43号住 | 46 " ・群馬町 三ツ寺III遺跡 27号住 |
| 12 " ・船橋市印内台遺跡 6号住 | 47 " ・ " " 14号住 |
| 13 群馬・月夜野町 藪田遺跡 5-41土埴 | 48 " ・ " " 5号住 |
| 14 " ・ " 藪田東遺跡 6号住 | 49 " ・太田市 小町田遺跡 12号住 |
| 15 " ・ " " " | 50 " ・群馬町 三ツ寺III遺跡 27号住 |
| 16 " ・ " 藪田遺跡 5-42土埴 | 51 " ・太田市 小町田遺跡 15号住 |
| 17 群馬・月夜野町 洞遺跡 69G | 52 " ・高崎市 下佐野遺跡II地区 5区57号住 |
| 18 埼玉・岡部町 六反田遺跡 A-堀2 | 53 " ・ " " 5区57号住 |
| 19 群馬・高崎市 田端遺跡 B-43住 | 54 " ・前橋市 荒砥島原遺跡 B-9号住 |
| 20 埼玉・花園町 台耕地遺跡 76号住 | 55 " ・ " 上西原遺跡 85号住 |
| 21 群馬・高崎市 下佐野遺跡II地区 7-55号住 | |
| 22 " ・ " " 4-5号住 | 第2図 |
| 23 " ・月夜野町 村主遺跡 33号住 | 1 No 2 |
| 24 " ・吉井町 黒熊遺跡 K 5-110号住 | 2 No 4 |
| 25 " ・高崎市 下佐野遺跡II地区 5-6号住 | 3 大阪・陶邑・T K305 |
| 26 " ・ " " 7-1号住 | 4 No10 |
| 27 " ・ " 田端遺跡 B区110住 | 5 No 8 |
| 28 " ・前橋市 荒砥上川久保遺跡 3-4住 | 6 No 4 |
| 29 " ・ " 中島遺跡 9号住 | 7 No12 |
| 30 " ・ " 荒砥東原遺跡 21号住 | 8 No17 |
| 31 埼玉・行田市 武良内遺跡 2号住 | 9 埼玉・岡部町 六反田遺跡 A区堀2 |
| 32 群馬・高崎市 八幡中原遺跡 152号住 | 10 No13 |
| 33 " ・粕川村 新宿遺跡 BH 4号住 | 11 埼玉・花園町 台耕地遺跡 66号住 |
| 34 群馬・前橋市 荒砥東原遺跡 21号住 | 12 No 7 |
| 35 埼玉・行田市 武良内遺跡 2号住 | 13 No16 |
| | 14 No26 |